

図3 事業継続計画策定に向けてのボトルネックと解決策（ワークショップ③の成果）

踏まえた実効性のある事業継続計画の策定が今後の課題であり、引き続きの協働と支援を進めていく。

4. 本ワークショップに関するアンケート調査結果

本ワークショップでは、障害福祉施設幹部職員などの参加者に、①被災経験に基づく教材を通じたイメージング力の向上、②他施設との情報共有を図り、事業継続計画（BCP）の必要性の理解、③災害対応経験のある施設との協働（グループワーク）を通じた新たな気づき、④災害時の組織体制など防災教育や研修等の必要性への認識、⑤自助を超える対策を知り、外部者との連携強化の必要性の5つ

の категорияに関するそれぞれ3問ずつ計15問の質問紙調査を、ワークショップの前後に実施した。なお、回答方法は、「強くそう思う」から「全くそう思わない」までの4件法を用いた。回答者が少ないため、研修前後の評価に関する有意差を検討せず、単純集計比較のみ行う（図4～8）。なお、自由記述は今後の検討を進める上で貴重なデータであることから、資料5にまとめて掲載する。

【カテゴリー1】被災経験に基づく教材を通じたイメージング力の向上

- ①自信をもって、災害対応業務にあたることができる
- ②災害について、いろいろな角度から考

えることができる

③過去の災害経験を将来の減災に生かす方法を知っている

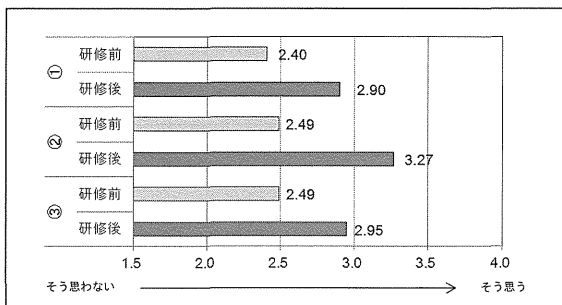


図4 被災経験に基づく教材を通じたイメージネーション力の向上

【カテゴリー2】他施設との情報共有を図り、事業継続計画（BCP）の必要性の理解

④他の事業所の災害への取り組みを知っている

⑤福祉事業所の支援計画・受援計画は必要である

⑥福祉事業所の事業継続計画（BCP）の作成は必要である

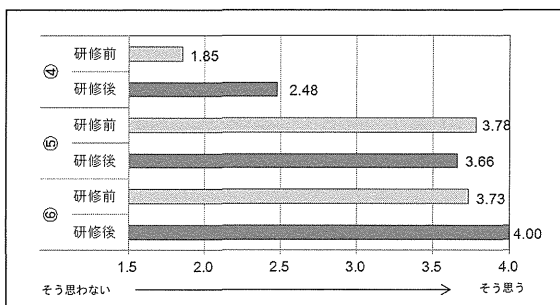


図5 他施設との情報共有を図り、事業継続計画（BCP）の必要性の理解

【カテゴリー3】「災害対応経験のある施設との協働（グループワーク）を通じた新たな気づき」

⑦災害対応の問題を一緒に考えることができる

⑧今回のWS研修は、新しいことを気づか

せてくれる

⑨サービス等利用計画に災害時の対応を盛り込む必要がある

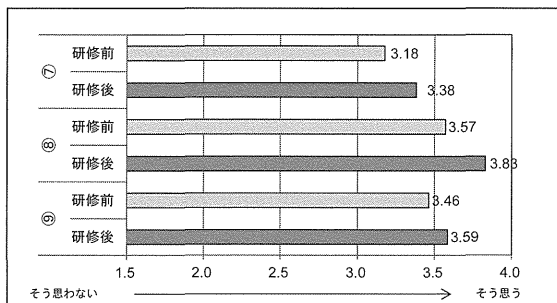


図6 災害対応経験のある施設との協働（グループワーク）を通じた新たな気づき

【カテゴリー4】災害時の組織体制など防災教育や研修等の必要性への認識

⑩災害時は、平時の組織形態のままに対応することができる

⑪平常時からの防災教育・研修は必要である

⑫福祉事業所に派遣される災害派遣福祉チームは必要である

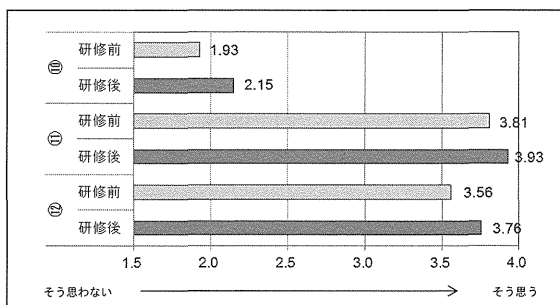


図7 災害時の組織体制など防災教育や研修等の必要性への認識

【カテゴリー5】自助を超える対策を知り、外部者との連携強化の必要性

⑬地域の町会、自治会、民生委員等との連携は必要である

⑭福祉関係団体等との連携は必要である

⑮地元自治体など行政との連携は必要である。

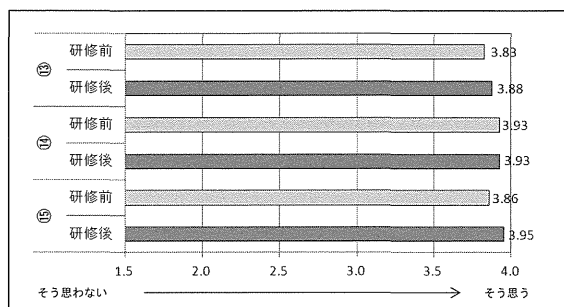


図8 自助を超える対策を知り、外部者との連携強化の必要性

5. まとめと今後の課題

本研究では、障害福祉施設の事業継続計画の策定を目指して、災害対応現場の臨場感ある記録を用いて、震災経験のない障害福祉施設長など幹部職員のイメージネーション力を向上させると共に、現行の防災計画における課題抽出及び見直しを試みた。アンケート調査結果(自由記述)及びふりかえりで参加者から得られた評価及び課題を列挙して、まとめと今後の課題にかえたい。

- ・改めてBCPの必要性を感じ、作成の必要性を痛感した。
- ・現在、作成されている防災マニュアルと対比できて良かった。他施設と意見を交わしながらの作成がよかった。
- ・単なる計画ではなく、具体性、十分性、仕組みのどこを見直せばいいのか理解できた。
- ・協会として、大災害時の被災会員事業所の支援方法を検討しており、BCPを意識した形にしたいと思っていたが、そのイメージを把握することができた。
- ・被害が大きかった地域の方から、その時の対応や事後に行ったこと、不足部分

など生の声を聞くことができ、被害が少なかった私達の施設では大変参考になった。

- ・地域で在宅生活をしている障害者の支援の在り方も必要。

- ・各施設の計画など、今回を機にデータベース化や情報共有ができれば、より具体的に当施設や法人の計画に反映されるのではないかと。

- ・詳細にするほど枚数が増えて災害時に機能しないのではないかと。いかに簡潔にわかりやすく作るかが課題。

- ・発災後の短期にとどまらず、原発事故時の避難した際などを想定し、長期にわたる利用者及び職員の精神面、生活面でのケア等も考えていく必要がある。

D. 結論

本研究では、障害福祉施設の事業継続計画(BCP)の策定を目指して、災害対応現場の臨場感ある記録を用いて、震災経験のない障害福祉施設長など幹部職員のイメージネーション力を向上させると共に、現行の防災計画における課題抽出及び見直しを試みた。具体的には、東北6県下41団体42名の障害福祉施設長など幹部職員を対象に、2日間のワークショップを開催した。まず、東日本大震災で被災した施設を対象にインタビュー調査を行い、被災経験のない施設職員等の防災力を高めるための教材の開発を行った。本ワークショップでは、その教材を活用することによって、参加者の災害対応のイメージネーション力を高めると共に、被災施設の経験の中から避難対応や安否確認など具体的な教訓を抽出することができた。また、

その教訓を踏まえ、各施設の現行の消防・防災計画において見直すべき課題点と具体的な改善策の検討を行った。さらに、今後の事業継続計画（BCP）策定に向けた障害福祉施設におけるボトルネックとその解決方策について議論し、今後の具体的な事業継続計画（BCP）素案に向けた有用な知見、基礎情報を得た。しかしながら、入所や通所などのサービス形態や利用者の障害の状況、昼夜の勤務形態や職員体制など、施設固有の状況を踏まえた実効性のある事業継続計画の策定が今後の課題であり、引き続きの協働と支援を進めていく予定である。

【参考文献】

- 1) NHK「福祉ネットワーク」取材班：東日本大震災における障害者の死亡率，ノーマライゼーション11月号，pp. 61-63，2011.
- 2) 厚生労働省社会・援護局：被災地の社会福祉施設等の被害，平成23年5月13年時点まとめ，2011.
- 3) 災害時要援護者の避難対策に関する検討会：災害時要援護者の避難支援ガイドライン，内閣府，平成18年3月，2006.
- 4) 厚生労働省：福祉避難所設置・運営に関するガイドライン，平成20年6月，2008.
- 5) 日本弁護士連合会：災害時における高齢者・障がい者の支援に関する報告書，東日本大震災から1年経過して，pp. 2-7，2012.
- 6) 鍵屋一・池田真紀：特別養護老人ホームにおける事業継続計画（BCP）のガイドライン作成に関する基礎的研究，地域安全学会論文集，No. 13，pp. 357-366，2010.

7) 静岡県厚生部，静岡県老人福祉施設協議会「特別擁護老人ホームにおける新型インフルエンザに対する「事業継続計画」の作成例第1版」，2009年8月.

8) 全国社会福祉施設経営者協議会「福祉施設経営における事業継続計画ガイドライン【地震対策編】」社会法人全国社会福祉協議会・全国社会福祉施設経営者協議会，2009年3月.

9) 鍵屋一・岡崎生幸：現場で使える！福祉施設の防災マニュアル作成ガイド，事業継続計画（BCP）発想でレベルアップするマニュアルづくり・人づくり・組織づくり，公益財団法人東京都福祉保健財団，2012.

10) 鍵屋一：被災時の防災を事業所と一緒に考える－事業継続は本人・家族にも大きな課題，手をつなぐ，全日本手をつなぐ育成会，pp. 12-13，2013.

11) 鍵屋一：災害時要援護者支援の新たな展開－福祉事業所の防災・事業継続を考える，地方行政，時事通信社2013年3月25日号.

研究発表

1. 論文発表

1) 鍵屋一：災害時要援護者支援の新たな展開－福祉事業所の防災・事業継続を考える，地方行政，時事通信社2013年3月25日号（査読無）.

2) 鍵屋一：被災時の防災を事業所と一緒に考える－事業継続は本人・家族にも大きな課題，手をつなぐ，全日本手をつなぐ育成会，pp. 12-13，2013（査読無）.

3) 柄谷友香：東日本大震災後の地域・生活再建を支える「中核被災者」の役割と

可能性－陸前高田市の自主防災組織による避難所運営課題を事例として－，総合学術研究論文集第12号，名城大学総合研究所，登載決定（査読有）。

2. 学会発表・講演等

1) 柄谷友香：自立再建に向けた地域リーダーの役割について，災害情報とバリアフリーな移動技術に関するセミナー，公益財団法人交通エコロジー・モビリティ財団，2012年6月14日，名古屋都市センター。

2) 鍵屋一：災害時も福祉サービスを継続する，兵庫県佐用町社会福祉協議会，2012年6月30日，佐用町南光地域福祉センター。

3) 鍵屋一：特別支援学校における危機管理－災害時のBCPを考える－，平成24年度埼玉県特別支援学校校長・教頭等合同研究協議会，2012年8月25日，さいたま桜高等学園。

3) 鍵屋一：モデルBCPに学ぶ危機管理，平成24年度東京都社会福祉施設士会秋季セミナー，2012年9月12日，淑徳大学講堂。

4) 鍵屋一：福祉現場で使えるBCP，（事業継続計画）策定セミナー－災害事例に学ぶ－，（公財）東京都福祉保健財団，2012年10月29日，東京都福祉保健財団研修室。

5) 鍵屋一：大震災から障がい者を守る，世田谷区手をつなぐ親の会，2012年11月8日，北沢タウンホール。

6) 鍵屋一：福祉事業者の支援力・受援力を高める，災害時要援護者の避難支援に関する検討会（第3回），内閣府政策統括

官（防災担当），2012年12月26日，経済産業省別館1111会議室。

7) 鍵屋一：大震災から障がい児を守る，平成24年度第2回東海地区特別支援学校知的障害教育校PTA連絡協議会，2013年2月2日，津市プラザ洞津。

8) 鍵屋一：今知っておきたいBCP（事業継続計画）の基礎知識，横浜市社会福祉協議会，2013年2月7日，ウィリング横浜12F研修室。

9) 柄谷友香：被災地の再建までを支える地域のチカラ－陸前高田市の「中核被災者」による支援に着目して－，「共生の時代を拓く，いわて女性研究者支援」総括シンポジウム，岩手大学男女共同参画推進室，2013年3月4日，岩手大学。

10) 柄谷友香：東日本大震災復興支援・講演と報告の集い－復興まちづくりと支援のあり方，名城大学，2013年3月15日，名城大学。

11) 柄谷友香：東日本大震災後の地域・生活再建を支える「中核被災者」の役割と可能性，東日本大震災・復興を考える，東北公益文科大学公益総合研究センター，2013年3月20日，東北公益文科大学。

12) 柄谷友香・鍵屋一：障害福祉施設における災害対応上の課題抽出と事業継続計画（BCP）策定に向けた取り組み，第32回地域安全学会研究発表会（春季），CD-ROM，男鹿市，2013。

知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

特になし。

資料1 ワークショップ参加者の構成（所在県、障害福祉分野での経験年数、東日本大震災の対応や経験）

No.	所在県	障害福祉分野での経験年数	東日本大震災時の対応や経験（支援・受援など）
1	岩手県	36	支援物資の提供。生活支援員の職員派遣。他団体との連携・協力。
2	岩手県	20	物流がストップしたことから、利用者への食事、ガソリン等の不足、ライフラインがストップしたことで、水・電気で苦労しました。 ・食材は地域の婦人会から協力してもらいました。 ・ガソリンは町の協力をいただきました（町との話し合い）。 ・水は町からいただきました。 ・電気はロウソク（危険なのでランタンに替える）、発電機を使用。
3	岩手県	14	施設に在職中に被災し、リアルタイムで避難指示ができた。通所施設なので、利用者の日中活動を確保、保障することを第一に考え、通常営業をしつつ、県知福協・障がい協のプロジェクトチームを発足し、沿岸施設への支援も継続的に行っている。
4	岩手県	6	・被災地域への職員派遣 ・育成会理事として、育成会会員被災者への支援物資の運搬と聞き取りなどを複数回行った。
5	岩手県	25	当時（3.11）は、地域生活支援センター内にある、多機能事業所のサビ管として勤務していた。当日から2日間は避難先（500人収容）振興局につめていた。その後、地域生活者（GH・CH）当該事業所の利用者/家族の安否確認を行っている。その後自法人の災害防災検討委員会メンバーでマニュアル作成に携わっている。
6	岩手県	28	法人の常務理事ということでしたので、全体の流れや福祉避難所の指定など全般に携わりました。
7	岩手県	35	・被災したグループホーム入居者の受け入れ（約4か月間） ・一般住民の避難所としての受け入れ（約5か月間）
8	岩手県	34	3.11時 沿岸の施設（生活保護法施設）に在籍、食糧不足、ライフラインが止まる中、なんとか見通しがつくまでの生活の確保のための支援を行った。自分もアパートに帰ることが出来ず、施設での備蓄食糧に頼らざるを得ず、出勤してこれない職員に代わって、1週間ほど泊りがけて24時間対応した。当初はある程度の要支援者を受け入れるつもりでいたが、電気が止まったことにより、トイレなど対応が出来ず断念せざるを得なかった。数日後からは避難所から不適応状況の障害者等を受け入れている。
9	岩手県	4	岩手県知福協・岩手県社協合同支援プロジェクトの事務局として、被災施設への物資支援・被災しなかった施設からの職員派遣、義援金配分、同じように障害者への支援を行っていた関係団体とのネットワークづくり（把握したニーズの相互乗り換えの場合はプラットフォーム会議の開催）等を実施。
10	岩手県	6	平成23年4月1日から7月31日までの間、岩手県下閉伊郡田野畑村に、北海道育成会からの支援により「福祉避難所」を設置運営した。 設置者：社団法人岩手県手をつなぐ育成会
11	岩手県		地震発生と通所施設として対応に大きな反省をしています。大事なものは現場にいる指導員の適正な判断が大事を左右することになります。 ・人は人を救うことを大事にしたいと思います。
12	岩手県	18	施設に隣接する集会所へ、利用者全員、職員で避難。 町内住民の方々も一緒に避難所化した集会所で利用者を自宅に帰すまで過ごす。自宅を失った利用者家族と共に仮設住宅が決定するまで避難所で過ごす。物資の確保、医療チームの確保、行政との情報確保に担当
13	秋田県	34	当事業所としては被害なかったため、他事業所への支援をした。 また、市の福祉避難所として運営しました。
14	秋田県	25	・個人としてない。 ・法人（事業所）としては、延べ8週間程、現地にて、生活支援、個人台帳等の作成に支援者を出した。
15	秋田県	25	ボランティアとして、被災地へ（沿岸清掃、側溝どろ上げ等）
16	秋田県	5	通所時間でしたので、利用者に声をかけ机にもぐったり避難誘導をし、各家庭に連絡をして送迎を行った。
17	秋田県	38	・震災時は施設を留守にしていたが、すぐに戻り、指揮体制に入りました。 ・利用者の怪我等の把握（0人でした）動援に対するケアの指示。 ・情報の収集のため、携行用TVを準備（私物を提供） ・断水前の飲料水確保（不足したため、隣の町から通う職員宅からもらってきた分もある） ・発電機を設置（園の備品…2000年問題の時に購入したもの） 男・女棟ホールへの配線→床暖ストーブとTVが使えた。 ・食糧の確保、水を使わない、使い捨ての食器確保など。 ・職員のシフトの確認、などなど……。
18	秋田県	8	きょうされん会員施設として、1週間山田町での施設支援に参加しました。入所施設の移転先の片づけ、作業所での利用者支援活動を行ってきました。
19	山形県	36	・法人としての受け入れ ①特別養護老人ホームでの受け入れ、10人、半年ぐらい ②救護施設での受け入れ、数人 ③老人保養所での受け入れ、数家族、短期間 ・他事業所への支援（数人） ・物資の送付 ・義援金

20	山形県	1	<ul style="list-style-type: none"> ・毎週ボランティアバスを準備して、職員、市民のボランティアを募り被災地へ出向いた（泥あげなど）。 ・被災地で必要な物資をききとり、次週はそれを運ぶことをくり返した（シーツ・ストーブ・オムツ・自転車など）。 ・社協なので災害後、どこへ支援したらよいか定まらず、人づてで、支援先を決めていった。
21	山形県	5	—
22	山形県	30	3/20～役10日間、宮城県沿岸部を中心に施設・グループホーム等に物資を届ける。 仙台市内で相談支援事業所等と共に在宅者宅に訪問し水・紙オムツetcを届けながら安否確認と状況把握、在宅者の家族にかわって医療機関に薬の受け取り、避難所に居られない家族のために自宅の片付け、施設の金庫の掘り出しetcを行った。
23	山形県	20	被災地に送る救援物資の仕分け・配送
24	山形県	33	<ul style="list-style-type: none"> ・ライフラインが確保されていたので不便はあったが比較的通常の生活が担保された。 ・職員が遠距離通勤が多く、そのガソリン確保が一番の問題でもあった。（勤務パターンを変更して対応） ・公用車のガソリンについては協力スタンドから優先的に供給してもらえたので助かった。 ・食糧品（食材）の大部分が宮城県からのものであったので、他県から入手できるように業者の… ・紙オムツetc衛生用品についても契約業者から直後に確保することで対応できた。
25	青森県	23	<p>①H23.3月末（震災後10日目）頃より、被災3県への物資支援と人的支援の計画とコーディネイト全般を担当した。</p> <p>②震災後半年後と1年目で、被災地の調査を行い、「復興へ向けて」という冊子を作成し、日本知的障害者福祉協会・東北地区知的障害者福祉協会を通じて、関係施設や機関に送付した。当時関わった方々や被災施設の現状報告などの生の声を伝えることができた。</p>
26	青森県	14	今回のエスノグラフィーに出された施設に対して、青森県の災害派遣チームの第1班のリーダーとして、5/末～1週間、衛生面を主として5：30～20：00まで支援に入った。
27	青森県	36	震災後1～2ヶ月経過後、他県の施設に職員を派遣する。
28	青森県	35	被災施設への職員派遣
29	青森県	5	燃料の供給が滞り、帰宅することが困難となった為、数日間施設に泊まっていたの生活が続きました。食糧に関しては各関係機関との連携により、何とか利用者さんには提供できました。冬季ということもあり、ストーブ等、倉庫から出し燃料を補給する。照明の確保など、全く災害への備えがなされていなかったと痛感しました。
30	青森県	32	<ul style="list-style-type: none"> ・食事支援（食事提供） ・相談（利用者さんへ声掛け） ・父兄（保護者）の対応
31	福島県	25	—
32	福島県	35	東京電力原子力発電所の事故により、さらなる爆発が起きたら、法人利用者全員を避難させなければならないと法人として決め、避難場所の確保、移動手段、避難先での生活等を想定し計画した。その後主治医のアドバイスにより、建物内に居て、準備をしてから行動した方が良いとのアドバイスにより、とどまることにした。
33	福島県	30	<p>原発事故により、富岡町（3/11～3/12朝→夕）→川内村（3/12～3/13朝）→田村市大越町（3/13～3/22）→田村市船引町（3/22～4/5）→千葉県鴨川市（4/5）いわき市（1/18～2/24）→田村市船引町（仮設）（2/24～現在まで）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・施設単位（50人）で移動すべきだったのか、全法人（300人）で移動避難が適切だったか。 ◎順を追って必要とするサービス（物品）が違ってきているが「タテワリ」の行政により、物資が目前にあっても渡して貰えない。
34	福島県	27	<ul style="list-style-type: none"> ・原発事故による避難者（家族4人、長女がダウン症）を受け入れました。両親は施設生活を送るのに苦痛であったと思われます。 ・原発事故による避難施設の利用者を受け入れました。（現在当施設入所）
35	福島県	16	<p>相談支援事業所として、市の障がい者総合相談窓口の対応。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・通所を休止し、入所、GHの支援。 一日でも早く事業再開できるように、勤務体制調整。
36	福島県	39	入所施設に勤務しているので、入所者への支援を第一に考え支援してきた。又、原発事故に対応して、施設毎避難を考え、候補地として神奈川、長野県が上がり、それぞれ法人として現地視察並びに関係者への依頼等に出向いた。
37	宮城県	3	職場で事務（総務担当職の為）
38	宮城県	35	法人全体の被災状況の確認、入所者の支援、地域避難者の対応、地域（福祉施設）への協力・支援を行いました
39	宮城県	31	指示・情報の整理をし職員に共有化をする役割をさせていただきました。また、外部との連携の強化と共有をしています。
40	宮城県	10	宮城県知的障害者福祉協会の対策室で総務、柴田様（東京都…協会前会長）の補佐をさせていただきました。
41	宮城県	25	在宅者への対応の為、避難所を回ったり、在宅者の家庭訪問を行った。避難所に行けた方は少なく、傾いた自宅や、自動車です生活する方が多かった。情報の伝達（医療行為のある方は、病院が受け入れてくれること等）をした。 ガソリンもなくなり、徒歩、自転車で回ったので、移動範囲が限られてしまった。
42	宮城県	23	施設が沿岸部にあり、床上浸水した。 地域の小学校（広域避難場所）に全員で避難。以後12日間避難所での生活を経験した。（利用20～30名、職10名程）後に塩釜市より後付けで福祉避難所の指定を受けた。

資料2 インタビューに基づく災害現場のイメージ共有のための教材

(1) 障害者入所施設

概要

東日本大震災により全壊した障害者入所施設において、車による避難対応や長期にわたる避難所生活の支援を担った施設長A氏と職員B氏の対応を記録したものである。震災当日、入浴中の利用者は大きな揺れに奇声を上げる、走り回るなどの行動をとったため、マニュアルとは異なる場所へ車での避難を行った。職員や物資も限られる中、一般避難者との折り合いから避難所を転々とし、利用者・職員とも体調を崩す中、不眠不休で利用者サービスを続けた。1週間後、同業者の支援の介入により、業務体制や利用者の状況も徐々に安定した。時々刻々移り変わる支援ニーズや施設長の判断と苦悩、受援計画の重要性も読みとれる。

1. 発災時の状況と車での避難対応

(A) そのときは私も事務所にいて、普段と違う大きな地震で、地震発生と同時に書庫は倒れる、あと、26、7年前の建物だったので、各廊下に吊るされているこういう大きい非常灯がぼんぼんとあったのですが、その緑のカバーがぼんぼんと落ちたり、鉄筋コンクリートの部分の吊り天井が弱く、揺れて落ちるものだったので、石膏ボード等がぱらぱらと……。

私は、まず館内放送で、職員に、「大きい地震なので利用者を落ち着かせろ」ということと、そのあと、長い地震だったので、「まず園庭に、外に避難させろ」ということで放送をかけました。と同時に、非常ベルは鳴る、電源が落ちる、あとは何ももう。

男子・女子ともに、程度の軽い方が入浴している最中でした。

避難訓練とかマニュアルでは、「それぞれの利用者が園庭に出る支援をする」、「声かけをする」だったのですが、当時は利用者もすくんで座り込む、奇声を上げる、走り回るといった行動が出まして、みんながみんな、利用者それぞれ、少ない職員の中で徒歩の避難は難しいと感じました。

というのは、風呂から丸裸で。タオル1枚で、「何だ、何だ」と出てきた利用者もいて、これは車移動しかないということで、29人乗りのマイクロバスと10人乗りマイクロバスの2台、それから軽自動車1台を持って、まず大型バスのほうに利用者を抱き抱えて全員乗せました。

厚労科研（代表：金子健）研究チーム調査 インタビューアー：板橋区福祉部長（当時）鍵屋一，名城大学大学院都市情報学研究科准教授 柄谷友香，全日本手をつなぐ育成会 室津大吾 鍵屋一（編集担当）：「災害エスノグラフィー（平成23年3月11日東日本大震災）」

裏山は、体育館とかオートキャンプ場がある場所だったので、そこがマニュアルの避難場所でした。本来であれば、裏道を通して階段を上ったりしながらそこに徒歩で行くのですが、車移動というのは、園庭の道を一旦下りて、町道を少し移動して、真っすぐですけれども、そういった行動を取りました。それがよかったのか悪かったのかというのを聞かれば、どうなのかなという、その場の判断でしかできなかつたのかなと感じています。

もし、徒歩で1人ずつ誘導していれば……。ちょうど避難する場所のテラスの天井が落ちたのです。それがぼんと落ちました。

丸裸の人も車に。まだ3月だったので普段は暖房をかけていたので、薄着したままで車に乗せて避難したわけです。サンダルもそのままだったので、避難はしたのですが、とりあえず、私は、指示を出して上に上げたのですが、そのほかに何が必要かと思ったのが、利用者の保険証なり、あと、利用者が飲んでいる精神薬とかは、万が一、日赤が来ても、どこが来ても、精神薬はそんなに持っていないだろうと、まず、処方されている薬を看護師に指示して、それもありったけ軽自動車に乗せて、高台に上げました。

現金とか事務用品は全く考えがなかつたのですが、もう一つ考えたのは、とりあえず2週間分ぐらいの非常食のストックをしていましたが、出せたのは3分の1程度で、3日か5日ぐらいの非常食、乾パンと非常水、ペットボトルの水を車に積み込んで。

早期の避難だったので、1台は3時前には上に上がりました。避難できたのは、おおよそ何分だろう。2分も走ればもう高台なので。

非常食等を積んでいる間に目の前の溝の水が少しずつ引いているのがわかつたので、「もうこの辺でいいだろうな。もう上がれ」ということで。

(B) 私も戻ろうとしました。戻って自分の車を上に上げようと思った。そうしたら、何の音かなという感じで、バリバリという感じで。あれ？何かなと思ったら水がぼわーっと来て。そうして水をかぶって。

2. 日頃の訓練を超えるその場の状況判断

(A) 日常は歩く訓練はしていましたが。

(B) いざとなって、あのような感じになったら、もう訓練どころではなくて強制的に。

(A) 火災の訓練は毎月行っていました。半分以上は、避難訓練だから、歩いて裏山へ。並びながら歩いたり、職員が抱えて連れていったりと。毎月訓練はしていましたが、はっきり言って、避難訓練ですと時間を考えませんでした。ただ、避難できたのは何分から何分で、何分かかつたという火災の報告書は書きましたけれども。

偶然にも、2時46分という部分もありますし、ケア会議を開くために職員の人数がある程度いる時間帯。事務も厨房職員も看護師もいる。これが、例えば夜の7時とか8時頃にそういった地震が来て、津波が来れば、職員が……。

夜勤は、男子1人、女子1人だけです。

(B) それを考えると鳥肌が立って。

(A) 自分でも揺れでパニック……。利用者、あとは建物が大丈夫かという。立っていることができなかつたので、まずボイラーを止めに行って、大きいボイラーを止めて、あとはガス漏れ、本当は鍵を開けてボンベのあれを止めなければいかなかつたのですが、十何機のガスボンベ、コンクリで覆ってある厨房のガスだったので、業務用だったので、元栓だけを止めたような格好でした。

必然的に、その場で判断して「これ、これ」とやっていった。なので、一から指示を出したわけではありません。いる職員がそれぞれ、「車移動」と決めたら、「はい。大型を持っている人はBさん」と、もう行動します。

(もし避難していなければ) 全員のまれました。

3. 限られた資源の中での避難所探し

(A) 普段、公用車のガソリンは、半分以上だったらもう詰めておくべきだと感じました。というのは、半分以下の油だったので、油はない、2週間、3週間、帰れる状態でもなかつたし、あと、避難した公用車しか上げなかつたし、ほかの公用車は新車もすべて流されましたし、職員の車もすべて流されました。このときは、もう道路が寸断されていました。裏山のキャンプ場のコテージがあったので、この3棟のガラスを割ったりして、一晩はそこで過ごしました。

雪が降ってくるし、町に火災が発生したのですが、高台なので見えるわけです。Bさんには悪かったですけれども、Bさんの自宅も津波と火災で全然なし、家族の方は、偶然にも……。

(B) 1週間ぐらいはね。車はないし。向こうも心配していたと思いますが、自分も何とか安否を確認したいという気持ちがあつたので。

(A) このコテージには一晩だけ泊まりました。ここで、乾パンとか水を飲みながら、どうにか薬を飲ませ、世話をして。流動食、刻み(食)の方もそれで我慢してもらつたというかたち。食べ物がないんですもん。乾パンをちぎって口にしてあげたというかたちです。あとは、水に漬けて。食べさせたと。

(A) 裏山から火災が発生したという連絡、あと、煙が来たので、道路も瓦礫でいっぱいなので、移動できたのは次の日の夕方近くで、「このままだったらちょっと大変だな」ということで、避難所探しをしに行きました。

ただ、どこの避難所も、「5、60名入るスペースはないよ」と言われて、まいったなと思って。ちょっと遠かつたのですが、県立青少年施設があります。キャンプを

したり、小学生とか中学生が2段ベッドで……。そういった、青少年施設に行っておりました。当時は避難者が2、3人しかいなかったのので、「いいでしょう」ということで、また戻ってマイクロバスと車に乗せて、非常食とか荷物を全部積み込み、このコテージにあった座布団から布団からすべて……。

4. 限られた職員による不眠不休の利用者対応

(A) とりあえず3日間ぐらひは水と乾パンの生活をして、3日目以降は自衛隊が入ってきたり、赤十字社の方が入ってきて健康管理を診てくれたり。ただ、3日もすると、手前どもの利用者も熱を上げる、嘔吐する、てんかん発作、下痢、せきといった症状があつて、依頼して診てもらったりしたのですが、その当時、やっぱり精神薬だけは持っていなかったようで、風邪薬とか、傷薬という部分しかなかったですね。

そのとき、インフルエンザとかノロ(ウイルス)とか……。胃腸炎ですか。そういった部分も発生……。隔離めいたこともしました。

(B) 消毒薬はないし。

(A) 当初は体育館で、一晩は一般の人と一緒にした。

どうしても徘徊する、奇声を上げる、そこで尿失禁はする、いろんなかたちで迷惑を掛けたので、「特別に、どうか別の部屋を貸してくれませんか」ということで会議室をお借りして。

コンクリートにこういったフロアが敷いてあるだけの会議室だったので、持ち込んだ布団をその上に敷いて、一晩寝ると汗で濡れます。それを折り畳み椅子に掛けて、乾かないうちにまた夜が来てという生活、冷たい濡れた布団に休むといった生活をしました。

(B) ベッドの個室みたいのがあるのですが、そこを借りて、そこだけ隔離みたいにして。消毒はないので、職員は、それこそハイターみたいのを薄めて。

それを消毒みたいにして。そして、あちこちを消毒して歩いて。

(A) 電気もなし、あと、暖房もなし、トイレは水洗なので、流すことができないので使えません。使ってもいいけど、下の池に行つてバケツで……。リレーして、トイレのほうに流す。

正直に言つて、落ち着きはなかったです。健康面、あとは食事面も、本当に普段の生活が一変したもので、われわれ職員でさえも、「どうしようか」と。われわれも体調を崩しましたが、利用者はそれ以上に、奇声を上げない人が上げたり、多動行動を取つたり、施設から逃げようとしたり、寒くても裸足で窓から外に飛び降りようとしたりといった多動行動を。

ともかく落ち着かない。夜も一睡もしない利用者等もいて、職員も何人か休ませながら、寝ないで見ている人がいなければ、夜間のトイレも……。

私も、利用者から逃げ出して徒歩でもうちに逃げたくなったという本心はありません。自分との葛藤もありました。自分の車も流された、財布もない、免許証もない、うちとの連絡もできない。なので、安否確認はどうかという、避難態勢はどうだったかというのが一点、また、保護者、家族との連絡の仕方はどうだったろうという……。聞かれていたのですが、携帯も通じない、道路も寸断している、油はない、もう連絡のしようがありません。

唯一ためになったのがラジオです。ラジオ一つかな。3、4日たってから、偶然にも、当日いなかった非番の職員が避難所を捜し当てて駆け付けてくれて、日によってどんどん職員が増えてきました。

避難所ではそれぞれ役目があります。「今日は『A』さんの担当」と、食事の受け渡し、いくらもらっていくら配分したらいいかという、ボールペンも紙も何もなかったのが本当に悲惨というか、そういったかたちでしたね。

そうしているうちに、自衛隊も入る、また、全国の障害者施設の方々が、知的障害者福祉協会なり、手をつなぐ親の会なり、社協なり、内陸の障害者施設の職員たちが支援に入ってくれました。ボランティアというか、九州からも来ましたし、大阪からも来ました。やっぱり言葉も通じるものです。同じ汚い仕事をしながら、よくこうやって来てくれるなど感心しました。

障害者というのは、うちが流されなくてもうちに帰れない人たちばかりです。「うちに連れて帰って暖かいところに置いてくれませんか」とも言ったのですが、どうしてもやっぱり、「電気もつかないし、うちも大変だから」という。そういったかたちでどうにか支援のほうはしましたけれどもね。

われわれも不眠で、1週間もいるとおかしくなったりするので、支援態勢が入ってきてからは交代でうちに帰りました。車もなかったのですが、ヒッチハイクで行ったり、あとは軽トラックを止めて、軽トラックの荷台に乗せてもらってという。

(B) とにかく、夜中に起きれば、それこそトイレ誘導だ、寝ないで徘徊している人がいるから、その面倒を見なければいけない。

(A) はい失禁だ、もうパンツもない、下着もない、どうしようと。冬だったのですが、失禁したのは下の池に行って洗って、絞って干してもかびかびに凍ってしまうし、なので、シーツの古いやつをこうやってあてがったり。

(B) 「何とか乾いてくれよ」という感じでした。

(A) 本当にものがない。ものがないというのは本当に不便です。今の生活が当たり前のようなのですが、ぜいたくですね。

歯磨きはない、風呂もない、シャンプーもしない、ひげは伸びる。それでもわれわれは、お互いに話をしても口が臭いというのは全くありません。もう本当にサバイバルみたいな。

災害時は職員が全く足りません。私もそうですが、そこに事務職員とか厨房職員も一緒に入って支援をしても、24時間というのは長いですね。

それが1週間、10日続くと、いくらわれわれでもちょっと体調を崩したり、おかしくなる部分があります。

(B) 現に、自分もあったのですが、タミフルを飲みました。

インフルエンザで熱が止まらなくて、タミフルを飲みました。

(A) 熱があっても支援しなければならない。うつす可能性があっても、支援する人がいないんですもん。

5. 同業者による支援の介入

(A) その後、北海道とか青森県から100人態勢で支援に入ってくれました。6人態勢で1週間交代で入ってくれても、初日はどうしても、何がどこにあるか、利用者のこともわかりません。わかった頃には入れ替えということになったのですが、メイン的な食事とかはわれわれの職員がします。

あとは、薬もそう。また、「一緒に休む方はこの方だよ」と。でも、慣れてくれば、「一緒に泊まってくれませんか」と声をかければ一緒に泊まってくれたりという部分がありました。

やっぱり勇気をもらったのは……。誰でも被災地には入りたくありません。自分たちの施設も職員がいっぱいなわけではないし、その中で、移動日も含めて8日、10日間交代で入ってきてくれる。それも、食事もままならず、水もない、お風呂も入れない。当初は風呂に1回も入らないで帰りましたし、徐々に態勢が調ってきて、週1回、「ちょっとした温泉場があるので入ってきてください」と、1時間か2時間の時間を与える。戻ってきて、また食事の搬入から、洗濯とか、支援という部分で、24時間態勢で1週間交代で入ってもらいました。

私を感じ、職員皆さんが感じたと思いますが、被災地に入って、「支援だよ」となれば、やっぱり人間というのは、見れば手を貸すという人たちがものすごく多かったです。嫌々ながら時間を過ごせばいいという方は1人もいませんでした。「思ったより利用者が明るくて、かえってパワーをもらった」と言って帰っていく方がいました。というのは、支援に入ってくれた施設の関係者、職員たちは、顔なじみなり、その利用者のことをわかっている人でないと支援ができないというのはわかって来ています。

なので、陰の力、トイレ掃除なり、ポータブルのあれを捨てに行行って洗ったり、歯磨きコップを洗ったりという衛生面といった部分を自らやってくれました。汚い仕事から……。

(B) 施設長もそういう仕事をやってくれて……。

(A) われわれは、手伝ってもらっても、きれいな仕事をしてもらいたいというのが

あります。ところが、自ら進んで汚い仕事というか……。掃除からすべて、あとは配膳関係の部分をやって、あとの食事介助は知っている職員がする。そうでないと、ちょっと不安定になったりする部分もあります。

後半のほうになってくると、いくら1週間でも利用者も慣れてきます。利用者も、印象がよければわれわれと一緒にです。心が通じ合う者は、知的障害であってもあるのです。私は、それだけは忘れないでおこうと思いました。

誰もやりたくない汚い仕事からしてくれたし、あとは、朝4時には起きて、外の掃除とかトイレ掃除をきちっと、眠い中を欠かさずに……。

(B) 施設で経験しているから、そういうことができるのです。普通の人 cameたら、多分、そこまで頭が回らないと思います。

6. 立地や状況に応じた避難の判断

(A) 例えば東南海で発生する部分に関しては、近くに高台があるのであれば、戻ることがあってもとりあえずは避難をする、戻ってはいけないという報道はされてきました。われわれも、戻って非常食を持ってきたというのはちょっと危険行為に当たりますけれども、実際は本当に、最後には私が犠牲になってもいいかなという覚悟があって指示した部分があります。

(B) そうやって1人も犠牲を出さないで避難をして、避難生活をしたというの。

(A) まあね。偶然……。

(B) やったかいがあったかなという。

(A) いつもの避難訓練はしても、その場その場の判断も必要かなと思います。「車の移動はだめ」、今、これはちょっとわかりません。確かに、スーパーがあったところの結構大きい駐車場で、徒歩で山に上がれば3分もしないで上がったのに、車に乗ってみんなが移動しようとして、渋滞になって波にのまれたというのが大半でした。果たして、車の移動がいいかといえば、それは、私は「×」だと思いますが、時と場合によっては、状況を判断して、それも可能かなという部分があります。

だから、東南海の場合も、夜間であればちょっと厳しいでしょうけれども、日中であれば、ある程度の避難経路は、高台がなかったら高いビルを目標にしておく部分が必要かと思います。町中での車の移動は、私は危険だと思います。

(B) 知っている人の中にも、1回波が来て、下がって行って来ないと思ってうちに戻ったりして、2回目で流された人も結構いました。

7. 利用者情報の管理方法

(A) パソコンのデータ、また、利用者の小さい頃からのデータはすべて……。

(B) アルバムから何から。

(A)「小さい頃、脳性麻痺でうんぬんかんぬん」とか、「どこの養護学校を出た」とか、そういった書類は紙ベースしかありませんでした。なので、こういった……。記録ですけれども、すべてなくなったので。保護者からまた聞き取りをして、これはわかりません。はっきり言って、津波で流されるとは100%考えていませんでしたので。

病院のカルテもそうらしいですけれども、(個人情報) 保護法にもよりますが、やっぱりデータは、火災とかいろんな部分を含めると、そこにだけ置くのではなくて、パソコンベースでデータ化を。

バックアップするところがなければ、定款からすべての部分をUSBに……。私も事務をやっていたので、ずっと昔からのデータベースもすべても流されました。

これを作るのは一苦勞になりますし、利用者の小さいときの履歴は、親御さんも亡くなっている、きょうだいとか、親戚の方とか、義理の姉さんだったりとなってしまうので、100%採るのは不可能かなと思っています。

最初は言われました。中には、「こういう大事なデータを、どこに流されて誰が見るかわかんない。どうするんだ」という保護者もいました。

あとは、利用者から預かっているお金も、金庫にあったやつもすべて流されて。なので、テレビが来たときは、ある程度の保護者には了解は得ました。そうしたら、「とりあえず、元気である姿を映すのであればいいよ」という部分で。

(以上)

【1班のワークショップ①から③の成果図】

やっときやよかった！			とにかく逃げよう！！			やるっきやない！！！！		
火災訓練は毎月行っていた	2週間くらいの非常食をストック	施設・事業所の建物設備の予防処置が不十分	災害時危険回避	長い地震、園庭に避難	もし徒歩で一人ずつ避難してればちやうどテラスの天井が落ちた	ご利用者の健康管理の〇〇からの〇〇	サバイバル生活	いる職員がそれぞれもう行動します
火災訓練は毎月行っている	津波高台避難の見通しを日常的に確保	公用車のガソリンは半分以上だったらもう詰めておくべき	発生時安全確保落下物等	もし避難しなければ全員のまれた	戻って非常食を持ってきたのは危険行為。実際には私が犠牲にいいかなと言う覚悟	〇社避難所が確保されていなかった	普段の生活が一変した	事務職員や厨房職員も一緒に、職員は災害時は全く足りない
避難訓練で時間を考えなかった	避難マニュアルの〇〇の中味を時間帯による対応	公用車のガソリンは半分以上だったらもう詰めておくべき	時と場合によっては状況を判断	とりあえずは避難する	赤十字の方健康管理精神薬はなかった	利用者も職員も体調を崩した	避難時の対応、健康の維持管理	支援ボランティアの対応
避難訓練ははしているもその場その場の判断も必要	避難時の指示・命令系統の整理	公用車のガソリンは半分以上だったらもう詰めておくべき	到着したまま車に乗せ避難 サンダルもそのまま	偶然にも職員の数がある程度いる時間帯 町中での車移動は危険	どこの避難所も「5、60名入るスペースはない」と言われた	われわれも体調を崩した	パンツも下着もない	衛生面の確保
	高台がなかったら高いビルを目標にする	ガソリンが半分以上だったら詰めておくべき	風呂から丸裸でタオル1枚で	町中での車移動は危険 車に乗ってみんなが移動しようとして渋滞になって流れのまれた	津波で流されるとは100%考えていませんでした	熱があっても支援しなければならぬ	特別にどうにか別の部屋	支援に入ってくれた施設の関係者、職員たちは顔なじみなりその利用者のことがわかっていないと支援できない
	避難経路の精査	半分以下の油	非常時の避難は丸裸タオル1枚も	ポールベンも紐もなかった	山田湾の水が引いて戻って平をあげようとして津波がまた来た	インフル・ノロの発生隔離めいたことをしない	トイレ水洗なので流せない、下まで行って水を汲んできた	支援者一陰の力汚い仕事
記録の保管の方法	避難時利用者が飲んでいる精神薬・非常食のストック	ポイラー止めたガス漏れ 元栓止めた		自分でも揺れでパニック		施設・事業所の職員への配慮	消毒がないので職員の高圧水ミターを薄めて対応した	支援用〇〇の対応 連携のあり方
保護法にもありますがデータはそこに置くのではなくパソコンベースでデータ化を	避難時の対応の抗精神薬の確保	ポイラー・ガス避難訓練で「やっておかなきゃ」	偶然にも職員の数がある程度いる時間帯	例えば夜7時とか8時とかに地震が来て津波が来れば職員が夜中は男女各1名	一から指示を出したわけではなく、いる職員に指示	事務職員も厨房職員も中に入って支援	消毒がないので職員の高圧水ミターをうすめて対応した	支援者にお願ひ指示することを話す
情報データのバックアップ	利用者の保険証・飲んでいる精神薬・処方されている薬	十何機の高圧水ポンプで覆ってある厨房のガスだったので、業務用だったので、元栓止めた	少ない職員の中では徒歩の避難は難しい	夜7時とか8時とかにそういう地震が来て津波がきたら...	発生時避難路の確保利用者の把握	当日、いるからって、非番の職員がかけつけてくれた。	消毒がないので職員の高圧水ミターを薄めて	
パソコンベースでデータ化とUSB	非常食・避難時の必要物品等の保管方法やその量(燃料の確保を含め)		いつもの避難訓練でもその場その場の判断が必要	夜勤の時間帯 夜勤男1人 女1人	少ない職員で徒歩の避難は難しい	不眠で一週間もいるとおかしくなる	避難時の対応、情報源の確保 ラジオ	避難生活を送るご利用者の活動支援
データのバックアップするところが必要					いざとなったら訓練どころではなく時間との争い	利用者から逃げ出したくなって徒歩でもうちに逃げたくなった	ラジオ	もう連絡しようがない
							保護者、家族との連絡の仕方	

過去の災害経験を学び、災害イメージを共有し、知恵や教訓を紡ぐ(ワークショップ①の成果) : 1班

具体を想定したマニュアルづくり

火災対策だけでなく防災計画を策定する	訓練が全職員(全員居る)ことを想定しているため、少人数では対応できない	保護者引き渡しまでのプロセスの明文化	災害伝言ダイヤルの代替手段の準備がされていない
震災その他災害対策が不十分	全職員がいない時は現場の指揮は誰がとるか？	地震後の報告本部との関係(要)	学校(関係先)との連携についての合意
防災計画の中味が抽象的表現が多すぎる。より具体的に	職員がいない時は役割分担はどうするか	通報・連絡 ・消防機関 ○ ・本部 無 ・家族 無 ・関係機関 無	地震発生時の職員の召集(集合)方法
マニュアルをもとにした訓練が実施されていない		地震発生後の活動	電気、通信が止まった場合の確認・連絡が明確でない
職員全体が施設マニュアルを把握できていない		連絡方法	
マニュアルが要約化されていない(全部普段から見れるのか?)		ご利用者の家族に対する連絡方法	
緊急マニュアル等其他の手順とセットになっていない		保護者の安否確認	
		緊急連絡網(利用者)の徹底(記載なし)	
		安否確認方法が記載されていない	

実効性の高い訓練

訓練の見直し(救助・救出資材の実践・訓練)	防災教育・訓練について記載なし
重度者の避難方法 例 車イス 歩行器 ストレッチ	震災後3日間の食事提供方法
地震発生後の活動	
避難指示に従えないご利用者に対する支援方法	
避難手順(マニュアル)が明確に定められていない	
避難場所のマニュアル(ルート)避難手段	
避難場所についてどこ？移動方法etc	
二次避難の場所と移動方法	
入浴中の避難対応	

備えて活用しよう

被災後の事業所の役割の明文化	生活用水確保	備品について記載なし(季節品を含む)
予防措置の記載がない	非常用トイレ確保	毛布・ブランケット
災害用〇〇の設置場所	非常用寝具の確保 アルミシート	寝袋等寝具
非常電源で使える箇所の配置図	災害に強い建物(施設)を建てる	ガソリン・携行缶
非常持出袋はこれではないのか	非常持出リスト無	飲み水が何日分、何食分使用できるか計算していない
非常持出物についての記載がない	地震発生時の対応非常時持ち出し用品の周知	ガソリンの確保
持ち出し品のリストアップ	持ち出し品のリストアップ	備蓄品に消毒薬やかとり線香など マスク、オムツなど
備蓄品について ・水 ・ガソリン ・食料etc	利用者の飲んでいる薬を確認 個人情報ファイル等	避難生活を送る上での暖房(健康面の配慮を必要とするご利用者への配慮)
薬がほとんど準備されていない その自ことに自宅から薬を持ってきている人もいるので園には備えない		寒さ対策の備蓄品が無い
非常持ち出し物についての記載がない		事前の準備対策が明確に記載されていない
		受けいれ者等見こした備蓄計画が具体的でない
		発電機 カセットボンベ・コンロ・ストーブ
		災害に強い建物(施設)を建てる)

現行の消防・防災計画の見直し(ワークショップ②の成果) : 1班

ボトルネック

まず何をやる？		指示・命令の混乱
だれが指示するのか？ 分りやすいマニュアル 役割分担 避難の際のリーダーを決め、その人の判断に	指示系統の確認 ①が不在 ①②が不在 ①②③は不在etcその	何が使えるか
【課題】 避難計画 防災計画の 周知、徹底	避難させる際の役割が 確立されていない	
避難必要時間は？	一人一人の利用者に誰 が付き添うか	全員避難できるか 避難場所を明確にする 1ヶ所だても次の場 所が...
情報確認	【課題】 地域の協力体制(障害 者への理解)	避難経路が周知されて いない
職員不足	【課題】 避難経路の安全避難方 法の周知	施設内の職員会議での 検討 個別支援計画へ のもしこみ
事業所内の一次避難場 所に素早く集合させる	避難路の確保	逃げ遅れのないための 方法・手段
課題 有事の際のご利用者の 行動把握	避難に応じない利用者 (パニック等)	みんなにすぐに声がか げられる拡声器などの ものを1ヶ所だけでなく 複数置く
利用者の異常行動	二次避難場所に移動す るか否かの判断	
歩けない利用者		
公用車のガソリン燃料 は？	どの公用車を利用する のか	
避難時必須物品の忘れ は？ 最低限の報告連絡は？		

解決方法

いる職員全員集合し指 示する？ 隊長は-〇〇〇〇 必要な係を担う者	役割を明確にし誘導・ 施設内の確認、車の手 配等スムーズに連携し ていく	災害時を想定した訓練	改編 計画を理解する職員教 育 訓練の徹底
しかし全員が先頭にな らないためにどうする か 指示系統	どのスタッフも同調性 バイアスをかけられる 人になる日頃の訓練	日頃の話し合い→とっ ぱりの状況判断を助ける 力	役割手順の明確化 マニュアル見直し
【改善策】 日頃からの地域との協 力体制の確保(障害者 の理解を含め)	地域協力体制 職員のかげつけ体制の 明確化(どのくらいの時 間でのどの程度あつま	緊急放送しまず集まる 「緊急事態発生」のア ナウンス	まず集合しぜんざい使 えるものの確認 利用者の状況・確認〇 〇を受ける
夜間休日 ペアになる利用者を決 めておく	【改善策】 計画を理解する職員教 育 訓練の徹底	普段の訓練の中で時間 計測を行い第1次、第 二次避難場所までの時 間を計っておく	避難に障害となるもの を廊下等に置かない
代わりになるものは何 は準備する(ラジオ・ アマチュア無線・行政 防災放送)	地域に知る、知っても らう	地域(町内会)の防災訓 練に参加	避難ルートを示した紙 を見やすい場所に掲示 しておく
日頃の訓練 特に自閉 症・ダウン症の方パニ ック 動かないetcに 素早く対応	【改善策】 ご利用者を発達障害・ 高次脳機能障害等の障 害理解の教育	避難を嫌がってしまう 人など重度の方への対 応を明確にする	通常の訓練
大きすぎたり、叱っ たりせず職員が冷静に 対応	車イス・リアカー等 の準備 避難路の整備	重度利用者を最優先に 避難させる(車椅子等)	
その日の利用者のリス トを作成しておき点呼 する(入所・通所・S S・日中一時・外出者)	車イス利用者等に応じ て乗車する公用車を決 めておく	車ごとに担当職員を決 めて日常的に点検し(給 油し)事務所に報告し ておく	
	避難時に持ち出す物の 把握 分りやすい所に置いて おく	連絡リストを作成して おく ・避難時必要リストを 作成しておき点検、確 認した上で〇〇(はする)第1次部隊へ利用者 の〇〇リストー第2次 部隊	

事業継続計画策定に向けてのボトルネックと解決策(ワークショップ③の成果)：1班

【2 班のワークショップ①から③の成果図】

愛はみんなを救う！！

インフル・ノロ隔離	避難時いつもと違う行動が出る利用者への対応	連絡 家族	避難生活の感染症対策
消毒液 ハイター	利用者のメンタル支援	家族の利用者引き取り拒否	病気対応 熱 嘔吐 発作等
(失禁) オムツ 代替え (シーツ)	利用者の興奮の中での避難	障がい特性により一般の人と避難生活ができない。	水・電気→ライフラインの確保
インフルエンザ発生対応は？	利用者の動揺 発生時・座り込む ・奇声をあげる ・走り回る ・職員にベッタ	避難所での24時間支援・職員の苦勞・利用者のとまどいと苦勞	連絡方法の確保
部外者の対応 助かること、役割を明確化する	職員の動揺 職員の健康管理 職員のメンタル	職員は自分のことは後にして利用者支援を優先しなければならないこと	ボランティアの課題 ・利用者対応 ・物資の場所 ・使用方法
	熱があっても入所者の支援をしなければならない事	情報 ラジオ 情報はラジオ1つ ボランティアからの情報収集は？	

練習第1！！

非常時持出し用品	避難時の利用者の薬(特に精神薬)の確保	夜間時等の職員が少ない時の避難	燃料・ガソリンの確保 公用車のガソリンが半分以下なら詰めておくこと	PC管理 バックアップUSBの活用
非常持出品リストアップが必要	公用車の燃料・ガソリン量 満タンに	精神薬等の薬を持ってきたこと	非常食・水を持ってきた	データ化すべて流される ↓ 紙に残す
・非常食 ・精神薬 ・処方薬	筆記用具・紙	公用車のガソリンを半分以下にしない 満タンに	避難 徒歩一車 なぜ訓練と違う	データのバックアップ の必要性
薬の重要性 非常持出しに	持参品 準備 ・保険証 ・薬 ・食料		施設・利用者のデータ 保存の在り方	データを紙ではなく、 データベース化すること

Break！！ the「正常化の偏見」

時間がない中での対応	館内放送 ・共有 ・落ち着かせる		
避難タイムの重要性	マニュアル通りの避難場所に行った	指示 その場の判断 訓練の重要性	入浴中の避難
その場その場での適切な判断	避難所探し→福祉避難所の必要性	夜間(職員体制が薄い時)に地震・津波が来たらどうなっていたか？	時間との戦いを認識していたこと
日頃の訓練も大事だが、その場の適切な判断が重要	ボイラーの元栓を止めたこと	少ない職員での避難	避難所 5~60人入れる場所の確保
・避難・誘導 ・声かけ ・リードする	ボイラー止める	非番の職員が駆けつけてくれたこと	支援者の健康管理 ・家族の安否確認もできない ・応援職員と連絡がと
	火災等の第2次災害の防止	館内確認 ・危険・被害状況 ・確認後、非常ベル止める	風呂から丸裸 タオル1枚→そのまま？
			避難所の不安が〇〇だった ↓ 1次場所

過去の災害経験を学び、災害イメージを共有し、知恵や教訓を紡ぐ(ワークショップ①の成果) : 2 班

備える

情報	物品
災害時の用援者（地域）のリスト化	<p>食料備蓄のリスト</p> <p>備蓄品目がかかれていない</p>
連絡情報のリスト化	<p>備蓄品目がかかれていない</p> <p>生活用品の確保が不十分</p>
衛星携帯電話の導入（他施設・事務局との連絡のため）	<p>日用品の防災用品の在庫のチェック</p> <p>発電機</p> <p>冬季に被災した場合の暖房対策が不十分</p>
被災後の通報の方法が具体的に示されていない	<p>食料・飲料の賞味期限のチェック</p> <p>建物の耐震診断の実施</p>
公衆電話（優先）の設置	<p>衛生管理の方法について</p> <p>危険物の名称 防止措置の具体的な方法</p> <p>大災害時に施設を頼ってやってくる地域住民の分の食料・水の確保が十分でない</p> <p>燃料・食料等の各企業との事前の調達協定の締結</p> <p>ガソリンの補給方法</p> <p>備蓄品等の持出し、具体性が無い</p> <p>災害時使用する備品が記入されていない。etc 発電機・ストーブ</p> <p>停電時の電源確保</p> <p>暖房方法について</p>

うごく!!

訓練	初動
訓練マニュアル作成—別紙でも可	<p>実際には誰が分担するのか</p> <p>・1次対応 ・2次対応 ・3次対応等</p>
訓練時の体制	<p>初動の具体的な仕方</p> <p>・訓練者 ・点検者 ・責任者</p>
毎日、朝と夕方に職員全員が集まり情報の共有化を図る	<p>消火活動を優先的に行う重要な施設が具体的に示されていない。</p> <p>火災発生時に優先的に持出すべき書類・データが具体的に示されていない</p>
施設に戻れない時を想定して	<p>発生後の命令の有り方 職員の行動基準</p> <p>例えば震度6以上なら全員集合するなど具体的に決めておく</p>
施設建物が使用不能になった場合の対応が記されていない	<p>データのバックアップの仕方について</p> <p>夜間など「各班」の人がいないときどうする？</p> <p>勤務時間外の夜間の対応について</p>

つながる

ネットワーク	
安否確認の方法が書かれていない	<p>避難訓練の回数-多いほどいい→反省も忘れずに</p> <p>消防署との連携が必要 地域防災との協力</p>
敬護活動、具体性に欠ける。メンタル等含む	<p>指定避難場所に避難してから対応が記されていない</p> <p>市町村との連携</p>
健康管理の方法について	<p>近隣施設との災害協定</p> <p>他地域施設との協力体制</p>
利用者安否確認の方法が記されていない	<p>周辺の被災状況を把握する方法は？</p> <p>利用者は基本は施設で、帰宅できる場合は家族と協議</p>
発生時非常口の確保 発生後利用者の確認、人数・ケガ・建物の点検等	<p>指定避難場所の特定2、3か所</p> <p>広域災害支援協定</p>

現行の消防・防災計画の見直し(ワークショップ②の成果): 2班